
天界観測

源雪風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天界観測

【Nコード】

N2321M

【作者名】

源雪風

【あらすじ】

言葉のない世界を、神様の手下が観察し、観察日記をつける。

言葉のない世界を想像したことはあるか。

私は神様に命じられて、下界の観察日記をつけることになった。

よく考えたら、命じられたというよりは、自給が良くて楽しそうな仕事だったから、自ら進んで名乗り出たと言った方がしっくりくる。

神様は短気で、おこりんぼで、娘を溺愛しているから、日記をつけるといったみみっちい仕事は全て手下どもにやらせている。

おっと、あまり神様の悪口を言っていると、私も言葉を奪われてしまう。

今回観察する下界の人間は、神様の悪口ばかり言っていたことが、神様にはばれて、言葉を取り上げられてしまったのだ。

さて、ぐだぐだ独り言を言っていないで仕事をするか。

人間たちはほら穴に住んでいる。

色々な道具を作りだし、協力して獣を狩っているから、知能はあるようだ。

獣の鳴き声や雨の音に素早く反応するので、聴覚もある。

嗅覚、方向感覚は特に発達していて、真っ暗な場所で迷っても、辺りの匂いの位置を目印にして、無事に帰ることが出来る。

狩りだけではなく、大人しい草食獣を家畜として育てている。

家畜は食べるだけではなく、狩りの対象を引き付ける囿としても使っている。

彼らは言葉を使っていたという記憶や、言葉を発する為の器官を取り上げられてしまっている。

しかし、うまく意思を伝え合っている。

一体どうやっているのだろうか。

よし、今日の分はこれくらいでいい。

神様がきちんと日記を読むのかも怪しいし、短気な神様は長文を好まない。

正当な理由があつて手抜きができるのは楽でいい。

翌日、手抜きをしたツケが回ってきた。

日記を読んだ神様が、「人間たちが言葉なしでいかにして意思を伝え合っているのか、下界に行つて調べてみよ。」と言いだした。

特別手当もなしに、危険な下界に行くはめになった。

こんなことなら日記を思わせぶりな終わらせ方にしなければよかった。

まあ、手柄をあげれば出世のチャンスでもあるし、やるしかない。

人間に化けて降りてきた地上は、だだっ広い荒野に肉食獣が一匹うろろろしている。

鋭い牙、黒光りするしなやかな体、目は黄色くギラギラしている。

ネコに似ているが大きく、悪くて凶暴そうだ。

あんな奴に襲われたら、ひとたまりもない。

と、考えていたらこちらに向かつて走つてきた。

ああ、こんなところで死ぬのか。

逃げたつて追いつかれる。

まだ家のローンを支払いきれていないのに。

もう悪黒猫（仮称）は、三メートル程の距離まで近づいてきている。

と思つているうちに、二メートル、一メートル、飛びかかれる！

私はとつさにうずくまった。

次の瞬間、鮮血が宙を舞った。

私は死んだのだろうか。

しかし出血し倒れていたのは悪黒猫（仮）の方だ。

一体何があつたのか。

安心し、力の抜けた体で、辺りを見回す。

遠くに男が一人いるのが見えた。

しかもその男がこちらに向かって歩いてくるではないか。

男の手には弓矢があった。

その矢は悪黒猫（仮）に突き刺さっているものと同じデザインだ。

なるほど、男が矢で悪黒（以下略）をしとめたから、私は死ななかつたのだな。

男はこちらを一瞥してかた、悪黒をかついで去って行った。

「ありがとう！」

私は叫んだが、男に届き、伝わったかどうかは分からない。

とにかく助かった。

これで家のローンが支払える。

力が入らず、ここから動けない。

横になって天を仰いだ。

まさか昨日言った神様への悪口が、神様にはばれていたのではないか。だからこんな危険な目に遭ったのではないか。

神様は私を殺す気なのだろうか。

これはまずいことになった。

いつまでも危険な荒野にいるわけにもいかない。

安全な所に移動しなければ。

確か人間はほら穴に住んでいた。

ほら穴を探せば何とかなるだろう。

辺りを見渡すと、荒野のはるかかなたに、茶色の岩壁が見えた。

よし、あそこを目指して歩いていこう。

かなりの距離を歩いたが、幸いにも再び悪黒に出会うことは無かつた。

おそらく悪黒の行動範囲の外に来たのだろう。

周りに注意しながら歩いているが、その他の肉食獣も見当たらない。

以前よりも茶色の岩壁に近づいた。

岩壁に黒い点が見える。

おそらくほら穴だろう。

目標がはつきりしたので、自然と歩くスピードが上がる。

でも、ほら穴に肉食獣がいたらおしまいだ。

人がいたとしてもよそ者の私を受け入れるとは限らない。

そんな暗い考えばかりが頭をよぎる。

しかし、今はほら穴に向かうしか良い方法が思いつかないので、考えても仕方がない。

ほら穴の中には人の気配があった。

私はほら穴の入り口で、入るか否か悩み、立ち止まっていた。

空はもう茜色に染まっている。

じきに暗くなるだろう。

夜の野外にいることは、悪黒に「食べてください。」と言っているようなものだ。

天界に帰るだけの力も残っていない。

血のように紅く燃える空を見て、ようやく決心がついた。

中に入ると、人間たちが一斉にこちらを見た。

言葉なしで敵意がないことをどうやって伝えたらいいか。

円形に並んで座った人々の中央には、悪黒とおぼしき肉がさばかれ、置かれている。

その時、私のお腹が、ぐぐぎゅると大きな音をたてて鳴った。

長い距離を歩いたのだから仕方がない。

その音を聞いた人々は、声なくして笑った。

円形に座った人々が移動し、私の目の前にちょうど一人座れるくらいの大きさの円の切れ目ができた。

どうやら仲間に入っていけらしい。

好意に甘えて輪の中に入ると、正面に見たことのある顔を見つけた。先ほど、悪黒から私を救ってくれた男だ。

ということは、さばかれたのは、私を襲った悪黒だろう。

悪黒に食われるはずだった私が、逆に悪黒を喰うことになるとは、運命の巡り合わせは恐ろしい。

男の隣に座っている女にも見おぼえがあったが、気のせいだろう。

悪黒の肉は、脂っこくなく、噛みごたえもあり、肉汁がじゅわっと出て、なかなかの味がした。

悪黒のくせにこんなうまいとは。

肉の栄養が頭に巡ったせいか、いいことを思いついた。

この機会を生かして人々を観察し、どうやって意思を伝え合っているか探ろう。

人々は目を合わせるが、身ぶり手ぶりは使わない。

しかし、何か面白いことが伝わったのか一斉に声なくして笑った。

声のある生活に慣れているので、気味が悪かった。

意思を伝え合っているのは明らかだが、カラクリが分からない。

感覚を研ぎ澄まして周囲の変化を掴もうとする。

空気中に弱い電気が流れているのが分かった。

どうやら電気で会話をしているらしい。

人間の体からは弱い電気が発生している。

その電気をコントローल出来れば、声の代わりとなる訳か。

脳の情報伝達も電気信号によるものだから、自分の感情や思い浮かべたことを直接相手の脳に伝えることが出来るだろう。

これは声を使って意思を伝え合うよりも正確で早くて便利だ。

カラクリを見抜いたからには、天界に帰って神様に伝えなければ。

肉をごちそうになったおかげで天界に帰るだけの力が回復した。

ほら穴から出て軽くジャンプすれば、天界に帰ることができた。

カラクリを報告すれば、ボーナスと出世のチャンスだ。しかし、悪黒から助けてもらった上に、食事までさせてもらった人々に、恩をあだで返す結果にならないだろうか。

カラクリを神様が知ったら、何をするか分からない。最近神様は、娘がしょっちゅうどこかへいなくなるせいで、ひどく不機嫌だ。

だから人間に八つ当たりをするかもしれない。

実際に私だって、危険な人間界の調査を任され、あやうく死にそうになったのだから十分ありうる展開だ。

しかし、下界に行ったのに何の収穫もないということになれば、神様は怒って、私を天界から追放しかねない。と悩んでいると、神様からお呼びがあった。

「何か分かったか。」

神様は見るからにイライラしていた。

歯ぎしりをし、目は血走り、人さし指は玉座の肘置きをトントントントン叩き、足はせわしなく地面を叩いてリズムを刻み、舌打ちをひっきりなしにしている。

下界で襲ってきた悪黒以上に怖い。

どうしてこんなヤツが神様をやっているのだろう。

神様にギロリと睨まれ、身の危険を感じたため、結局全て話してしまった。

神様は報告を聞いて、良いはずを思いついた子供のように目を輝かせた。

「よし！生意気な人間どもに罰を与えてやろう！」
楽しそうに宣言する神様。

明らかにストレス解消の糸口を見つけて喜んでいる。

あゝあ、こんな仕事引き受けなければよかった。

案の定、下界の様子を見ると異変が起こっていた。

地上にあつた一番大きい火山が噴火しはじめていた。

噴火のせいで発生したガスや灰が、大気中に満たされて電気がうまく伝わらなくなり、人々は意思を伝え合うことが出来なくなっていた。

混乱し、逃げまどう人々に刻一刻とマグマが迫っている。

このままでは人間が滅んでしまう。

「ハハハ！滅びる人間！ハハハ！」

神様の狂ったような叫び声が聞こえる。

神様め、普段ストレスをためすぎだ。

しかも、解消方法がラスボスみたいで、歪んでいる。

人間には恩があるのだから、何とかしなければ。

だけど、どうやって？

したっばの私には神の力を打ち消すことは不可能だ。

ふと下界に目をやると、人間の中に慌てず騒いでいない者がいた。

私を助けた男と、見覚えのある女だ。

不意に女が黄色い光に包まれた。

光が言消えるとそこにいたのは、神様の娘だった。

神様の元を抜け出して人間界の男に会っていたのか。

手を繋いでいる。

二人とも仲がよさそうだ。

見知らぬ私を助けてくれた優しい男だから、神様の娘が惚れるのも無理はないだろう。

そうだ、神様の娘なら人間を救うことが出来る。

娘は不思議な発音を連ねて、呪文を作った。

するとマグマはみるみるうちに固まって、人々の元へ届く前に止まった。

人々は声なくして喜び、娘をたたえた。

天界では、神様が怒り狂っていた。

それもそのはず、娘が隠れて人間界の男に会っていた上に、男と相当仲が良い様子だ。

我を忘れた神様は、下界に様々な災害を起こしたが、ことごとく自分の娘が解決してしまった。

神様はシヨックを受けて自宅に引きこもった。

仕方がないので、神様の弟が代わりに政治を行うようになった。

それからというもの、天界にも下界にも長らく平和な時代が続いている。

一方、下界に住みついた神の娘は、男との間に子を成した。

その子は、話すことが出来た。

人々は神の娘とその子を崇め奉り、その力を得ようと、贈り物をしたり、おだてたりした。

今まで神様に半ば監禁されて育てられてきた神の娘は、悪や建前をよく知らないので、素直に喜んだ。

そして全ての人々に言葉を与えたのである。

これが果たして人間にとってよいことだったのか、災いだったのかは、これからも観察してみなければ分からない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2321m/>

天界観測

2010年10月13日22時08分発行